



制服は、しばしばある記号として存在している。その記号性は、とりわけ視覚的なものとして考えられがちだ。いっぽうで、視覚障害者は制服とどのように関わりあいながら生活しているのだろうか。

見常者がほしくなるような白杖を

ひろせ こうじろう
民博 民族文化研究部

「見せる」と「乗せる」

幸か不幸か、僕の半生は制服との縁がほとんどなかった。中高時代を過ごした東京の盲学校には制服がなく、就職後も学生と同じようなラフな服装で日々通勤している。スーツを着るのは年に数回程度である。そもそも、全盲の視覚障害者にとって制服とはどんな意味を持つのだろうか。

制服の機能として、「見せる」と「乗せる」のふたつがあると思う。周囲の様子が見えない僕が苦手なのは「見せる」方である。学会や研究会に出かける際、他の参加者がどんな服装をしているのかは気になる。自分だけ場違いな服を着ているのではないかと不安。さらに、それを自力で確かめることができないもどかしさ。視覚障害者には、他人の視線に惑わされず好きな服装を選ぶことができる自由がある一方、見た目を客観的に判断できない不自由も付きまとう。「自分は○○である」と周囲に向かって宣言するのが制服の第一の目的といえるが、残念ながら「見せる」点において、制服は自由かつ不自由な視覚障害者には通用しない。

次に制服の第二の機能である「乗せる」については、視覚障害の有無はあまり重要ではないだろう。制服を身に着けることによって、「自分は××である」というモー××である」というモードに入るケースは多い。このモード変更が「乗せる」その気させる」という意味である。学生服、スポーツ選手のユニフォーム、さまざまな職種の仕事着など……。じつは、制服との付き合いがない僕も、毎週一回、「乗せる」を体感している。僕は学生時代からの趣味で武道を続けているが、稽古着（道着）は制服の一種といえよう。現在、僕は週一ペースで合気道の道場に通っている。合気道では初段を取得すると、袴の着用が認められる。つまり、袴は有段者であることを他者に「見せる」目印としての働きを有している。

白杖なれど薄情を求めず

視覚障害者にとって、「見せる」「乗せる」の両面で制服と同じような役割を果たしているのが白杖である。古今東西、目が見えない者は歩行時に杖を使用する。日本中世の絵巻物にも、杖を頼りに各地を旅した琵琶法師の姿が描かれている。視覚代行のツールとして、杖は視覚障害者の安全確保には欠かせない。

それでは、なぜ視覚障害者が用いる杖は白なのか。白杖の誕生については諸説あるが、第一次大戦後、各国で自動車の交通量が増加するのに伴い、盲人用杖が白くなったようだ。白は目立つので、「ここに視覚障害者



白杖で足元を確認し、横断歩道を渡る（2014年12月撮影）



大半の視覚障害者は携帯に便利な折り畳み式の白杖を使っている（筆者が愛用するドイツ製の白杖）

がいるから注意してください」と呼びかけるのに最適と考えられたのだろう。道を尋ねたり、横断歩道を渡る際、僕も白杖を他人に「見せる」とを心がけている。白杖は視覚障害当事者には「白杖」する勇気を、社会の多数派である見常者には「薄情」ならぬヒューマンイズムを求めるシンボルと位置づけることができる。

合気道の袴とは少し性質が異なるが、白杖が視覚障害者を鼓舞することとも忘れてはならない。一般に、中途失明者は白杖に強い抵抗感を抱く。僕自身も、弱視だった中学一年生のころは、白杖を持つことを拒否していた。不特定多数の人に「僕は視覚障害者です」とわざわざ白杖する白杖の使用には気乗りしなかった。できれば見常者と同様に、街中をさりげなく歩きたいというのが、視覚障害者の願いである。ところが、全盲になると聞き直るしかない。完全に失明し、白杖を握って盲学校の門を出たとき、大げさに言うなら「視覚障害者として生きる」覚悟ができたのかもしれない。

家や研究室では自分の障害を意識することは少ないが、白杖を片手に外出すれば、僕の心身は視覚障害者モードに切り替わる。そして、白杖に乗せられた僕はフィールドワークのために、日本全国のみならず、海外にも出かけている。白杖は視覚障害者の歩行補助具として限定的に使われるので、デザインはシンプル、バリエーションもない。もっとおしゃれな杖、目が見えている人がほしくなるような白杖があればいいのに。目が見えなくても、「見せる」のは楽しいはずである。おしゃれな白杖を持って街を颯爽と歩く視覚障害者が増えれば、世間の障害観も変化するに違いない。



合気道の有段者講習会にて。技をかけているのが筆者（提供・京都合気会）